海国日本

奥村　太

この度、入来院久子様のご好意により「炉ばたセイ談」へ寄稿させていただく機会をいただきました奥村　太（おくむら　ふとし）と申します。なに分、この様な冊子へ文章を書くといった経験がないことから、皆様のお目汚しにならないか心配ではございますが、折角いただいた貴重な機会ですので少しだけお付き合いいただければ嬉しく思います。

本題に移る前にまずは自己紹介をさせていただきます。私は昭和５７年生まれの４１歳で、家族は妻とペットの犬（ヤマト）となっています。私の出身は神奈川県相模原市というところで高校卒業まで生活しておりました。高校卒業後単身オーストラリアに行き、シドニーにあるニューサウスウェールズ州立大学に入学し卒業までの４年間を現地で過ごしました。大学卒業後は日本に帰国し海上保安庁という政府機関に入庁いたしました。入庁後は教育機関である海上保安学校がある京都府の舞鶴を皮切りに、石川、広島、沖縄、大阪、東京にある巡視船や陸上部署での勤務を経て、昨年（２０２２年）４月から鹿児島に所属する巡視船での勤務となっています。

私の勤務しております海上保安庁という組織は、最近ではドラマや映画、テレビなどで少し名前を目にする様になってきましたが、主な活動場所が「海」ということもあり、なかなか国民の皆様の目に映る場所で活動することが少なく、馴染みが薄いと感じている方も多いと思います。そこで今回は折角の機会ですので、私が勤務しています海上保安庁に

ついて少しだけご紹介させて頂ければと思います。(あまり堅苦しく描いてしまうとつまらなくなってしまうとも思うので、記載内容や表現については少し平易なものとさせていただきますが、その点についてはご容赦いただければと思います。)

海上保安庁という組織は、簡単に言いますと海の警察と消防となります。陸上はそれぞれが別々の組織となっていますが、海の上のことに関しては陸上における警察の仕事も消防の仕事も海上保安庁が担っています。そもそも、海の治安維持や安全確保といった仕事は、太平洋戦争前には旧帝国海軍が一元的に担っていました、しかし太平洋戦争で敗戦したことで旧帝国海軍は解体され、戦後日本の海には治安維持や安全確保を担う組織が無くなり、密貿易や密入国を含む様々な犯罪が横行する「暗黒の海」の時代が訪れました。

この様な状況を問題視した当時の日本政府は米国を中心とした連合国との折衝の末、海上での治安維持及び人命・財産の安全確保を主任務とする新しい組織として１９４８年５月１日に当時の運輸省（現・国土交通省）の外局として「海上保安庁」が設置されました。海上保安庁の創設にあたっては、米国の沿岸警備隊（コーストガード）がモデルとされましたが、組織の性質については「非軍事性」が明確化され、純粋な法執行機関として今日まで活動を続けることとなっています。

(※海上保安庁法により、当庁の任務には「海上における法令の励行、海難救助、海洋汚染の防止、海上における犯罪の予防及び鎮圧、犯人の捜査・逮捕、船舶交通に関する規制、水路・航路標識に関する事務、その他海上の安全の確保に関する事務」とされている。)

設立以後、時代ごとのニーズに答える形で

徐々に強化され、今では職員数約１万４千人、船艇約４５０隻、航空機約９０機を擁する世界でも有数の海上法執行機関となっています。

皆様ご承知のとおり、日本はその国土の四方を海に囲まれており、周辺国との国境は全て海で隔てられています。その様な地理的特徴と太平洋戦争を含む歴史的背景から、北方領土、竹島、尖閣諸島といった課題を抱えています。この様な日本の現状において、周辺国との関係を不必要に悪化させず軍事的な衝突といった不測の事態を避ける意味において、「非軍事」組織である海上保安庁の重要性が年々増している状況にあります。皆様の中には、海洋進出を拡大する中国等に対して「なぜ海上自衛隊が対応しないのか？」という疑問をお持ちの方もいらっしゃるかと思いますが、状況を軍事的な衝突に発展させずあくまで平和的に解決するためには、軍事的組織である海上自衛隊ではなく非軍事組織の法執行機関である海上保安庁が矢面に立つことが、日本の平和と国民の皆さまの安全安心の確保につながるものとなっています。少なくとも海上保安庁の職員についてはそうであると信じて日々の業務に従事しています。

この度、初めての鹿児島勤務となりましたが、この、侍の魂が至る所に根付いている当地での勤務は身が引き締まる思いがする一方、その様な環境において日本と日本に住む皆さんの安全安心のために任務従事できることをとても嬉しく感じています。まだまだ若輩の身ではありますが、これを機会に皆様と交流を深めさせていただき、多くのことをご教示頂ければ幸甚でございます。

（海上保安庁一等海上保安正）